地域の「しあわせ」を考え・行動する

Annual Report

2016- 2017（2016.4.1 ～ 2017.3.31）

NPO法人 よこはま地域福祉研究センター

特定非営利活動法人
よこはま地域福祉研究センター
Yokohama Community development Reseach center

VISION

しあわせ（福祉）の実現のために、
誰もが可能性を追求してやまない
柔らかな心と勇気に溢れる社会

私達の行動指針

ＮＰＯ法人よこはま地域福祉研究センターは、設立５年目を迎えることができました。私たちの取り組みは、全て「人々の幸せの実現」を共通の目的として行っています。

また、そのプロセスでは、既存のありかたに捉われない柔軟な発想とイノベーターであろうとする勇気を大切にしています。私たちの行動指針は、今年も変わりません。

共通の目的・意欲・支え合いをモットーに
研究センターが一丸となって、事業を行うために、日々、確認、実行します。

顔の見える関係づくりから　はじまる　はじめる
設立時の私たちの理念です。いつも、顔の見える関係が、取り組みの始まりです。

対話・対話・対話
話す×聴く。内部でも外部でも広げます。

人・もの・場　すべてエンパワー
新しいものを生み出すことにもこだわります。今ある存在価値を高めることも大切にします。

インクルーシブ（共生）へのこだわり
特定の人だけの社会ではありません。だれもの「しあわせ」にこだわります。

CONTENTS

3　2016年度を振り返って
4　TOPIX　2016ー2017
6　審査員になろう！Food presentation
8　違うっておもしろい。障害への向き合い方を考える。
10　障害児の保護者のサロン
11　仕事を辞めないための介護準備講座
12　どうする？生きづらい国？にっぽんの若者の未来
15　しびれんウェブサイトの企画運営
16　子ども・若者の育ちや自立を考える協働事業
18　社会福祉協議会のソーシャルワーク実践に向けた協働事業
20　神奈川県生活支援サービス担い手養成研修
22　横浜市地域ケアプラザ職員等養成
25　新宿区認証保育所の認可化移行支援業務委託
26　福祉サービス第三者評価
28　会計報告・活動計算書
30　2017年度に向かって
31　団体概要／会員募集

2016年度を振り返って

センター長　副理事長　佐塚　玲子
Reiko Satsuka

2015年９月、厚生労働省が発表した「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現―新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」（以下､「新福祉ビジョン」）は、今後の福祉改革とそれを担う福祉人材の育成・確保について、包括的で大胆な提案でした。

新福祉ビジョンの柱は３つ。一つ目は、「分野を問わない」「全世代・全対象型」の「新しい地域包括支援体制の確立」。二つ目は、「生産性の向上と効率的なサービス体系の確立」。そして、三つ目は、「新しい地域包括支援体制を担う人材の育成・確保」です。

その後､2016年６月には｢ニッポン一億総活躍プラン｣が閣議決定し、経済政策として国民全員参加型の社会創り、成長と分配の好循環メカニズムの実現が強い経済を実現するとして「働きかた・子育て介護の環境整備・教育環境の整備・希望出生率 1.8 の実現・介護離職０実現」と合わせてＧＤＰ 600 兆円を目指す取り組みの計画を発表しました。

これら政策の背景に､私たちが直面している人口減少・高齢化。更に福祉ニーズの拡大があることは言うまでもありません。そして、それを支える社会保障財源の乏しさを補い社会の活性化するための経済好転を如何にするのか様々な視点で実現しようとしています。

一見、積極的改革のようにみえますが、容易には解決できない重い課題を背負っているからこその政策と受け止める必要があるでしょう。何より、これら課題の解決が、行政や福祉専門機関だけではなく、全ての国民にも課されていることに気づかなければなりません。

2016 年度のよこはま地域福祉研究センターの事業を振り返ると、全ての事業をとおして、変化が続く社会の今を観ることに努め、様々な人と共有し、課題解決の道を探り、一歩を踏み出そうとする人を拓く取り組みをした年であったと思います。

研究センター事業の主軸である各プロジェクト事業では､担当する事務局職員が共通に気づきを得ました。「プロジェクト間で繋る必要がある」｢インクルーシブ（共生）の実現には分野を超えた取り組みが必要」「参加者が多世代になった」等々です。

良いことだと思います。縦割りの壁が低くなり、対象も世代も分野も包括した取り組みが増えてきています。ネットワークは更に広がり、様々な人や組織と協働もさせて頂きました。知識や情報の足りなさに悩むことも多かったものの、わくわくする充実した時間であったことも間違いありません。本当に感謝いたします。

詳細は、是非、次ページからをご覧ください。次年度、更に沢山の出会いがあり、対話ができますようにと願って、今年の振り返りといたします。

PROFILE　1960 年生　慶応義塾大学卒
神奈川県立保健福祉大学　大学院修了
横浜市地域ケアプラザ職員、認定 NPO 市民セクターよこはまの勤務経験から地域福祉への関心を深める。2012 年特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故泉一弘氏と設立。以来、センター長　副理事長として勤務

TOPIXS

福祉サービス第三者評価事業 (P26-27)

開設から平成 28 年度までの 4 年間、横浜市の認可保育所を中心に福祉サービス第三者評価の評価機関として事業を行ってきました。この 4 年間の実績は、保育所が 56 件、障害分野が 8 件、社会的養護分野が 3 件となり、保育所の評価案件が 80%以上を占めています。

新宿区委託

新宿区認証保育所の認可化移行支援業務 (P25)

東京都が独自に制定している「認証保育所」の「認可保育所」への移行を支援する本事業は、受託して 3 年度目となりました。2016 年度、新宿区内の認証保育所は 20 施設、そのうち、認可化移行支援業務の対象施設は 14 施設でした。支援実施の結果、2 施設については、2017 年 4 月から認可保育所となりました。また、2018 年 4 月の移行を目指して準備に入った保育所もあります。

5/9〜12/19 横浜市委託

横浜市地域ケアプラザ職員等養成研修

・地域包括支援センター職員向け（基礎・応用）
・地域交流コーディネーター向け（基礎・応用）
・合同研修 (P22-24)

横浜市地域福祉コーディネーターと地域包括支援センター職員、地域ケアプラザ所長の 5 職種を対象とした研修を実施するとともに、180 名の受講者を対象に「合同研修」に関するアンケート調査を行いました。

8月 肢体不自由児・者と家族のためのおでかけマインド発信マガジン

「せんだいist。」発行 (P15)

肢体不自由児と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「せんだい ist。」は、昨年の「よこはま ist。」に続き、第 2 号として発行しました。バリアフリーで楽しめるお店やスポットの紹介やお母さん、お父さんたちが、日々の暮らしで感じること、お出かけの工夫など、等身大のリアルをお伝えしています。

7月〜2017.3 神奈川県社協委託

子ども・若者の育ちや自立を考える協働事業 (P16-17)

神奈川県社協・神奈川県・神奈川共同募金会との協働事業。1 月には交流会、3 月には、第 1 号の「子ども・若者の居場所づくりガイド」を発行しました。次世代を担う子ども・若者の未来を考え行動するたくさんの方々に出会い、活発な対話をしています。

10/19〜2/28 神奈川県委託

生活支援サービス担い手養成研修 (P20-21)

県下 8 圏域 16 か所で、「生活支援サービス担い手養成研修」を実施しました。この取り組みは、小地域で「見守り」・「買い物支援」・「外出支援」などの生活支援サービスの担い手となる人材を育て、地域の人々の暮らしを支えることや新たな活動も創出されることを期待して実施。

9/11・10/2・10/23・11/27
社会教育・啓発プロジェクト
公募型男女共同参画事業

仕事を辞めないための介護準備講座 (P11)

仕事を続けながらも介護を乗り切るために、具体的なロードマップ（イメージ）をもつことが大切。知っておくべき情報は何か、事前に動いておくべきことは何か、いざとなったらどうするか、介護のもやもやがちょっぴり晴れる準備講座　全 3 回 + サロンを開催しました。

20 16

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

20 17

全国肢体不自由児特別支援学校PTA 連合会 ウェブサイトの運営　2016.4〜2018.3 (P15)

全国肢体不自由児 PTA 連合会の保護者や先生のリアルな声を届け、様々な人々にも気軽に関心をもってもらうために、SNS やウェブサイトを媒介とした情報発信の運営業務の委託を受けています。昨年度のリニューアルに続き 2 年目となりました。「つなげる」「つくりだす」「育てる」をキーワードに、変化しつづける有機的なサイト運営を心がけています。

4月〜2017.3 神奈川県社協委託

コミュニティソーシャルワーク実践に向けた協働事業 (P18-19)

「アセスメント」をコミュニティソーシャルワークの基本としてとらえ、県内大和市（鶴間地区）と足柄上郡大井町をモデルに、よこはま地域福祉研究センター・神奈川県社協・大和市社協・大井町社協の 4 者が協働で取り組みました。

当センターは伴走支援プログラムの企画・実施と冊子の企画・制作・デザインを担当しました。

9/21〜3/28 障害者と家族の地域生活支援プロジェクト
数歩先行く障害福祉

違うっておもしろい。障害への向き合い方を考える (P8-9)

障害者に対する差別解消や合理的配慮など「同じ」を目指す動きも重要ですが、それだけでは見えてこない「違うことの面白さ」に目を向けた理論編、現場の実務に直結する実践編を実施しました。

理論編・実践編

8/26・11/1・11/14・1/23・3/16
障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

障害児の保護者のためのサロン (P10)

3 年目を迎えたサロンでは、参加者とアドバイザーの境目をなくしフラットに語り合える場所として定着しつつあります。障害児・者の保護者の皆さんが自分自身のために時間を使うことで、新しい出会いや場所の発見につながる楽しさを提供してきました。

11/18・11/25・12/3 こどもの地域生活支援プロジェクト

どうする？生きづらい国？にっぽんの若者の未来 (P12-14)

こどもの貧困に対する支援背景や支援の実際と現状課題について考えました。こどもや若者に必要な支援が、「衣食住、教育」など必要に応じ多角的な支援が必要になること、さらにその家族への支援も必要となるケースが多いことなどについて、理解を深め解決に向けてそれぞれの立ち位置で「繋げる」「繋がる」ことを目的として実施しました。

3/28 番外編（勉強会）障害者と家族の地域生活支援プロジェクト
数歩先行く障害福祉

審査員になろう！Food presentation (P7)

障害福祉事業所の商品について、現場職員のプレゼンを聞き、試食したうえでお客様目線でシビアに審査していただくという、初めての企画。

番外編（勉強会）

数歩先行く障害福祉

審査員になろう！Food presentation

～共生社会創造のための商品品評会～

障害福祉事業所の商品について、現場職員のプレゼンを聞き、試食し、お客様目線でシビアに審査していただくという、初めての企画。会場の参加者全員が審査員です。今回は食品限定ということで、①味②価格③デザイン④安全性⑤買うか、買わないか？の5つの項目で審査していただきました。

参加者の皆さんの採点シートは、自由記述欄から溢れるほど、各自の好みだけでなく「こうしたらもっと魅力的になる」といったアドバイスの宝庫でした。障害者と直接的な接点はなくとも、商品を通じてコミュニケーションができる。顧客となることを入口に、自然な形で共生社会に参画し、障害者の存在も他人事ではなくなる。改めて「もの」の持つ力を感じています。そんな出会いの橋渡しの方法の一つとして、引き続き開催していきますのでご期待ください。

フローチャート（当日）

①商品についてプレゼンテーション ▶ ②審査員が試食、採点 ▶ ③ゲスト審査員からコメント ▶ ④採点シート回収、集計 ▶ ⑤商品販売タイム ▶ ⑥採点結果発表

実施概要

日　時：3月28日　19：00～21：30

会　場：さくらワークス関内

プレゼン事業所＆商品：ブナの森（横浜市緑区）　食パン / はらから福祉会（宮城県）　おからパン / 一の会（横浜市神奈川区）　三色すみれ / あしたば工芸（横浜市緑区）　レモッシュ / カプカプ川和（横浜市都筑区）　チリクッキー

ゲスト審査員：流通アナリスト　渡辺　広明さん /(株) 3・SUN・TREASURE　横田　美宝子さん

参加延数：50名

プレゼン参加者の声

これから売り出そうとする商品について、客観的な評価を聞くことができ参考になりました。今後年齢別のリサーチなどもしていければと思います。

皆さんからのアドバイスによりターゲットとする市場が明確になりました。

審査員参加者の声

とても勉強になるセミナーでした。レベルの高い商品が多く、パッケージや営業を強化すれば必ずもっと売れると思います。次の企画も楽しみにしております。

心を込めて作られている商品を試食できてよかった。職員・利用者の皆様の日々のお仕事が商品一つ一つを通して伝わってきました。

ゲスト審査員

(株) 3・SUN・TREASURE
代表取締役　横田　美宝子さん

プレゼン参加事業所へメッセージ

作業所ごとの想いが商品に反映されており、温もりが詰まった親しみやすい商品だったと同時に、味やパッケージに際立った特徴がなくまだまだ伸びしろがあると感じた。

プレゼンしたからこそ気付けた「何か」を持ち帰れたと思うのでその何かをそのままにせずに手も心も動かし続け「ならではの味・たったひとつの商品」を生み出して頂きたい。旨味の核となる物語をまたぜひ聞かせて下さい。今から楽しみです。

参加者

横浜在住ワーキングマザー
吉川　裕子さん

縁あって、この会に参加致しました。参加された各団体様の商品の成り立ちや、その製品に対する思いに心打たれました。

なので、審査に当たっては、味、材料、値段等を考慮し、真剣に採点しました。会の中で、ゲスト審査員の方の「繋がる努力」という言葉が、個人的にとても印象に残りました。この様な会に参加する事が、色々な活動を知る切っ掛けとなる様に思いますし、理解に繋がると思います。これからの活動にも期待します。

障害福祉ワーカー向け研修

数歩先行く障害福祉

違うっておもしろい。障害への向き合い方を考える

〈企画目的〉

理論編　全2回

2016 年 4 月に障害者差別解消法が施行され、合理的配慮の観点からハード、ソフト面の様々な整備が進められています。差別解消とは、文字通り障害者を社会の一員としてとらえ、付き合っていくこと。したがって、よりよい関係性を築く知恵を誰もが持つことが必要です。そのためには、「既存の障害に対する認識を変える」こと、さらには「障害っておもしろい！」と皆が開眼するような、ダイナミックな思考に触れる機会を作りたいと考えました。そこで理論編では､「障害を欠損でなく価値ととらえる考え方」､「働くことの意義と共働の可能性」について、誰でも学べる講演会、トークセッションを実施しました。

〈プログラム〉

■第1回

テーマ：「見えない」ことは欠落ではない

～障害に対する思考を変える～

開催日：9月21日（水）18:30~21:00

会　場：マスマス関内フューチャーセンター

講　師:東京工業大学　リベラルアーツ研究教育院

　　准教授　伊藤　亜紗氏

■第2回

テーマ：誰もが「働く」ことが当たり前の社会へ

～障害の限界に挑む～

開催日：10月26日（水）　18:30~21:00

会　場：さくらワークス関内

講　師：文京学院大学客員教授　松為　信雄氏

　　社会福祉法人はらから福祉会　理事長　武田　元氏

実施概要

対　象：障害者の就労・雇用等に関わる現場職員、保護者、当事者などテーマに関心のある方

後　援：横浜 YMCA 福祉会（理論編）、横浜市健康福祉局（実践編）（公財）日本社会福祉弘済会　社会福祉助成対象事業

参加延数：100 名

実践編　2コース

実践編では、障害者の労働を的確にプロデュースし生産性を高めるために、現場ワーカーが必要なスキルを獲得することを目指しました。合理的配慮を念頭に、労働プログラムを開発・改良し、実行し、ともに取り組み支えながら利益を上げるという、難題に取り組む障害者就労・雇用の現場。多様な課題の中から、2016年度は「経営マネジメント」、「作業・労働プロデュース」の2コースを設定しました。各回に先駆的な実践者を招き、実践報告から有効なノウハウを獲得するだけでなく、コース監修・アドバイザーが論理的に解説。さらに参加型のディスカッションにより疑問を解消するという、実務への即効性を狙った内容としました。

実践編作業・労働プロデュースコース アドバイザー

横浜市健康福祉局障害福祉部
就労支援係長　江原　顕氏

昨年、神奈川県内の障害者施設で、たいへん傷ましい事件が起きました。加害者の特異性はあるとしても、福祉に携わる者として改めて、障害の有無に関わらず誰もが普通に地域で生活できる社会を作っていかなければならないと痛感しました。

私は、ただ障害のある人が働けばいいと思っているわけではありません。障害のある人が普通に参加できる社会を、「働く」ことを通じて実現させたいと願っています。

そのためには、単に「障害」を売り物にしたり、また言い訳にしたりするのではなく、その人の仕事や製品が社会に認められるように支援をし、また社会に働きかけることが必要だと考えています。

今回、よこはま地域福祉研究センターの講座に参画して、熱い思いをもった受講者や講師とふれあい、その理想が実現できるような気がしてきました。それだけの理念と企画だったと思います。この成果をぜひ今後も展開していってください。

〈プログラム〉

【経営マネジメントコース】

コース監修･アドバイザー:中小企業診断士・当センター理事　為崎　緑氏

第1回　**テーマ：見せる?見せない?プロモーションの極意**

開催日：1月16日（月）13:30~16:30

会　場：さくらワークス関内

講　師：(株)恋する豚研究所　飯田　大輔氏

第2回　**テーマ：売上と報酬をどうつくるか?**

開催日：2月1日（水）13:30~16:30

会　場:さくらワークス関内

講　師: 社会福祉法人はらから福祉会　理事長　武田　元氏

社会福祉法人　共働舎　ファールニエンテ　萩原　達也氏

【作業・労働プロデュースコース】

コース監修・アドバイザー:

横浜市健康福祉局障害企画課　就労支援係長　江原　顕氏

第1回　**テーマ：どんな障害があっても受け入れるアート工房の実践**

開催日：1月19日（木）13:30~16:30

会　場：ウィリング横浜

講　師：社会福祉法人みぬま福祉会　工房集管理者　宮本　恵美氏

第2回　**テーマ：笑顔あふれる菓子工房の実践**

開催日：1月30日（月）18:00~21:00

会　場：ウィリング横浜

講　師：社会福祉法人　湘南の凪　八重樫　譲氏

株式会社　3・SUN・TREASURE　横田　美宝子氏

なかくふれあい助成金配分事業

障害児の保護者のサロン

親子で作業所見学

3年目を迎えたサロンでは、参加者とアドバイザーの境目をなくしフラットに語り合える場所として定着しつつあります。今年度は、「はたらく場所」を親子で見学したり、実際に障害者の支援をしている方から障害のある人たちの魅力について語っていただく機会を設けました。他にも新しい場所や人との出会いから、毎日が豊かに過ごせるきっかけをご紹介した一年でした。

また、2回にわたり子どもの将来について「成年後見」や「あんしんノート」を使い「親の思い」を周囲に伝える方法を考えました。ワークショップも実施して、制度や法律を知るよりも伝えたいことをイメージして行動に移すことの大切さが重要だと気づかされた時間でした。

障害者の保護者の皆さんが自分自身のために時間を使うことで、今後も障害種別・年齢関係なく、家族だけでなく支援する方々ともつながりながら、障害児・者とその家族の暮らしが社会とつながっていくような情報や催しを企画していきます。

子どもへの思いを言葉に

支援者側の思いを聞く

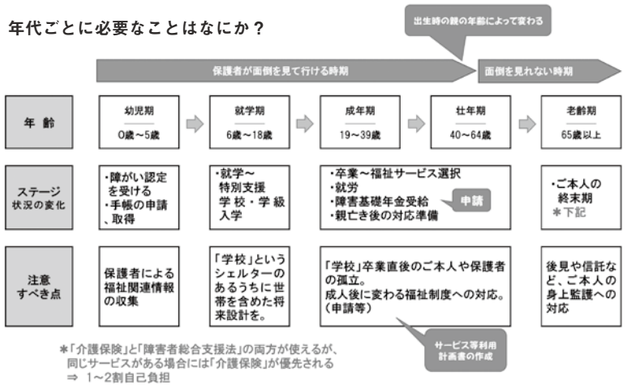
手仕事でリフレッシュ

〈プログラム〉

第1回　**「障害のある人の新しい仕事のカタチを見に行こう」**
　　見学先：地域活動支援センター　こそあどぐるん
第2回　**「親が今日からできること」（前編）**
第3回　**「親が今日からできること」（後編）**
　　アドバイザー：斎藤　聡子さん（成年後見つばさ）
　　会場：りせっとカフェ関内
第4回　**「障害のある人といっしょにいること」**
　　会場：ボタニカルカフェ おからさん
第5回　**「手仕事でリフレッシュ」**
　　講師：「chaikha」武田綾子さん

障害があっても子どもの人生は
その人のもの

年代ごとに必要なことはなにか？



引用：ぜんち共済株式会社・手をつなぐ育成会作成資料

実施概要

開催日：第１回　2016年８月26日
　　第２回　2016年11月１日
　　第３回　2016年11月14日
　　第４回　2017年１月23日
　　第５回　2017年３月16日
参加延数：34名

社会教育・啓発プロジェクト・公募型男女共同参画事業

仕事を辞めないための介護準備講座

仕事を続けながらも介護を乗り切るために
具体的なロードマップ（イメージ）をもつことが大切

世界に先駆けて超少子高齢化社会へ向かう日本では、介護保険制度を含む支援体制の再構築に追われています。2014年の平均世帯人数は2.5人。共働き家庭世帯、独身男性の両親と同居世帯、老々世帯など、介護の担い手として期待されてきた家族の様相も様変わりしています。「要介護者」を支援する制度の財源もひっ迫し、介護保険だけで支えることは難しいのが現状です。

一方で「介護者」を支える法的な制度はなく、ようやく2010年頃から「介護者」を「ケアラー」と名づけ、サポートする動きが出てきました。現在働く介護者は291万人。内女性は160万人。介護離職は1年で10万人と言われています。また転職や介護離職をした人の5割が介護開始から1年未満で仕事を辞めてしまっています。こうした状況を少しでも改善するために、介護の導入編として、大枠をイメージしできるよう、自己のケアマネジメント力を高めることを目的に企画しました。知っておくべき情報は何か、事前に動いておくべきことは何か、いざとなったらどうするか、介護のもやもやがちょっぴり晴れる準備講座、全3回を実施。

〈プログラム〉

第1回　**介護で仕事を辞めないためにまず知っておくこと**
第2回　**イメージしよう「介護とお金」**
サロン　**当事者や経験者を囲む対話型サロン**
第3回　**ダブルケア**
　　～介護と育児が同時にきても慌てないために～

講師
・NPO法人 よこはま地域福祉研究センター センター長　佐塚　玲子
・社会福祉士　主任介護支援相談員　新井　仁子氏
・（一社）ダブルケアサポート　植木　美子氏　澤木　麻利子氏

実施概要

日　時：第１回９月11日（日）10：00-12：30
　　第２回10月２日（日）10：00-12：30
　　交流サロン10月23日（日）10：00-12：30
　　第３回11月27日（日）10：00-12：30
会　場：フォーラム横浜
対　象：現在仕事や育児をしながら、親が高齢になってきている世代の方
　　介護について問題意識はあるが、どのように情報を収集し、整理、
　　準備したらよいか迷っている方
参加延数：72人

こどもの地域生活支援プロジェクト

どうする？生きづらい国？にっぽんの若者の未来

こどもの地域生活支援プロジェクト　成果目標

すべてのこどもが健やかに育つ社会の実現
こどもの地域福祉の向上

現状理解
今こどもを取り巻く環境はどうなっているのか？
何が起きているのか。
鈍らないようにアンテナを張り現状を常に知る。

↓↑

啓蒙・教育
現状に対してセンターは、この部分に着目して啓蒙している！という事を、たくさんの人に興味を持ってもらえる手法、手段で上手に発信する。

支援技術開発
対人技術って見えづらい。見えづらい技術、方法を可視化する。誰にでもわかりやすく、定着しやすくする。

支援力アップ
支援力ってなんだろう。どんな力？何が必要で何が求められているのかを探る。
個人の実務能力を高め、結果的にはチーム（集団）の組織力を高められるようにする。

ネットワーク構築
地域、同じ考え・同じ問題に直面している人、団体、企業、場所と繋がって広がって、お互いに問題解決出来るよう育っていく。

今後も引き続き、当研究センターのプロジェクトに興味のある方、
ご賛同下さる方々と共に、企画、実施していきます。

今年の研修テーマを「どうする？生きづらい国？にっぽんの若者の未来」と大きく掲げたのは、正しく、日本の未来を担うこども、若者の課題を今大人である私たちが真剣に考えないと、取り返しがつかないことになる、という危機感からです。

これまで、当センターでは「聞こえていますか？家庭から、地域からの子育てＳＯＳ」「地域でどう支える？子どものいる家族の暮らし」を研修テーマとして、様々な講師をお招きし、近年のこどもの地域生活と貧困の関係を中心に、多様な方々と一堂に会し勉強する機会を持ち、議論を深めてきました。

28年度の研修も地道に子ども・若者の問題を取り上げ尽力していらっしゃる講師をお呼びして〈どうやって子ども・若者の問題に向き合っていくのが良いのか。〉と模索している研修参加者の方々と、近い距離で現在の問題点や政策の現状、実践者の活動報告や今後の方向性や期待について話し合いました。

どのような事に対して私たちは無知だったのか。そしてなにを知ったのか。問題改善に向けて、誰が、いつ、どこで、なにを、どのように行えばよいか。

29年度は、子ども・若者の中にある複合的な「貧困」を、28年度の研修参加者の中で『一緒にプロジェクトメンバーとして考えたい』と、手を挙げてくださった方々と共に企画、実施していく予定です。

〈プログラム〉

第1回　**「マージナルパーソン化を防ぐ学習支援の役割」**
講師：ＮＰＯ法人さいたまユースサポートネット代表理事　青砥　恭 氏

第2回　**「希望って何ですか？」**
講師：下野新聞デスク　山崎　一洋 氏

第3回　**「課題先進国ニッポン」を斬る！**
講師：静岡県立大学教授　津富　宏 氏
作家・活動家　雨宮　処凛 氏
（株）シェアするココロ　石井　正宏 氏

実施概要
第１回　2016年11月18日（金）13：30～16：00　さくら works 関内
第２回　2016年11月25日（金）13：30～16：00　さくら works 関内
第３回　2016年12月３日（土）9：30～12：30　ウィリング横浜
対　象：学生、社会人、こどもや若者の支援に携わる人、このテーマに関心のある人
参加延数：58 人

第１回目は北海道で居場所支援を行っている団体の方々も遠路はるばる参加してくださいました。

第２回目は新聞記者の山崎氏。
取材を通して当事者の声や生活を見てきたからこそのお話でした。

「地域」で「こども・若者」に対して①気になっている事②欠けている・足りないと思うこと③出来る事って何だろうをそれぞれ出し合い発表しました。

BOOK ゲスト講師・代表書籍

若者の貧困・居場所・セカンドチャンス
青砥　恭
さいたまユースサポートネット編

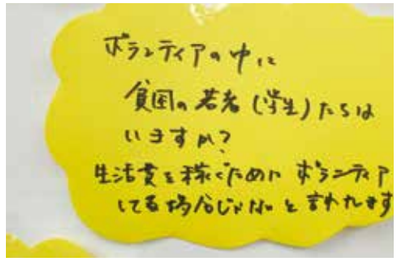
貧困の中の子ども
下野新聞子どもの希望取材班
山崎一洋デスク

静岡方式で行こう !!
津富　宏
NPO 法人青少年就労支援ネットワーク

雨宮　処凛
自己責任社会の歩き方

こどもの地域生活支援プロジェクト

どうする？生きづらい国？にっぽんの若者の未来　第3回（勉強会）



参加のみなさんから出た感想や質問を集め分類。
ファシリテーターのセンター長が参加者からの「知りたい」「聞きたい」を引き出しました。

ゲスト

静岡県立大学
国際関係学部
国際関係学科
教授　津富　宏氏

日本の若者政策の概要と、静岡における取組を話すというお題をいただき、この二つのトピックを生煮えのままつなげて話していたように思います。日本では就労支援に偏っていた若者政策を、どのように具体的にその他の分野（教育、労働、福祉など）と架橋していくかが問われています。石井さんは教育、雨宮さんは労働との架橋についてお話しいただき、私は、生活困窮者自立支援制度（福祉との架橋）を手掛かりに、静岡で作り出している地域連帯についてお話ししました。当日は、アウェイの地である横浜で、雨宮さん、石井さんに挟まれてお話させていただくので大変緊張いたしました。地域は違っても、静岡の取組みがお役に立つと信じておりますので、お話を聴いてくださった方々に響いていることを願っております。

株式会社シェアするココロ
代表取締役
石井　正宏氏

登壇させていただきありがとうございました。津富先生の相変わらずの“地べた的”な下から見上げるような、それでいて懐に深い視点、雨宮さんの当事者の方々への共感性と、同時代を生きてきた代弁者としての言葉に、同時代を生きた自分もビリビリと共振しつつ、自分のできることや、関わりのスタンスを確認することができる企画でした。すべての人をフレームイン！このミッションの実現のために、またここから頑張ろうと思いました。

作家・活動家
雨宮　処凛氏

非常に刺激的なシンポジウムだった。「自己責任」といまだ言われがちな若者を巡る状況の社会的背景が、見事にあぶり出された。ちなみにあの時、石井さんが「弱いものが更に弱いものを叩く」現象について「トレイントレイン」と名付けていたのがツボで、今後使わせてもらおうと思っている。

全国肢体不自由児当別支援学校PTA連合会ウェブサイト

しぴれんウェブサイトの企画運営

zspi.jp

目的

全国肢体不自由児PTA連合会の保護者や先生のリアルな声を届け、当事者でない層の人々にも気軽に関心をもってもらいたいというニーズから、昨年度のリニューアルに続き2年目の運営に携わっています。「つなげる」「つくりだす」「育てる」をキーワードに、変化しつづける有機的なサイト運営を心がけています。

全国をつなげるコンテンツ

「大会情報」「わたしのまちの学校」「育てびと」「便利グッズ＆サービス」など、様々な角度から肢体不自由児とその家族を支える情報の提供や、コンテンツ作りに力を入れています。最近では、父母の皆さんからの情報提供も少しずつ増え、facebookとの連動で10,000リーチに届くコンテンツも現れました。次年度も、一人ひとりとつながりを作る"ゆるやかなプラットフォーム"になるよう、育てていきたいと思います。

せんだいist。

B5版　36ページ　カラー
価格：500円
販売元：ジアース教育新社
発行日：2016年8月25日

肢体不自由児と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「せんだい ist。」は、 昨年の「よこはまist。」に続き、第2号として発行しました。バリアフリーで楽しめるお店やスポットの紹介やお母さん、お父さんたちが、日々の暮らしで感じること、お出かけの工夫など、等身大のリアルをお伝えしています。

神奈川県社協委託

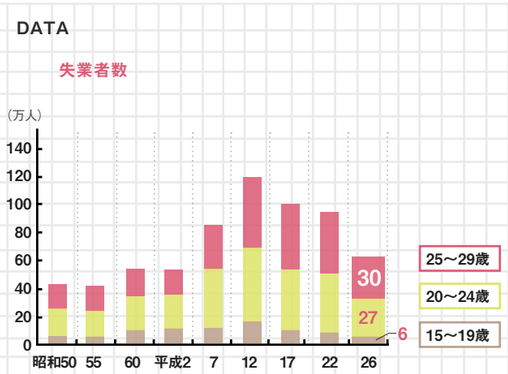
子ども・若者の育ちや自立を考える協働事業

1989年、合計特殊出生率1.57と戦後最低の数値を記録し「1.57ショック」と表現されました。厚労省は、将来の深刻な人口減少が予測される中、1994年「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」を策定し出生率回復を目指しました。それから20年以上経過した今日、様々な子育て支援策が具体化され、「子育て支援」という言葉が社会的にも認知度を高め地域には複数の子育て支援施設が設置されています。

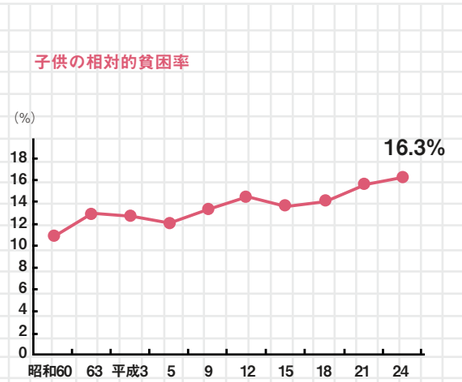
しかしながら、少子化対策として展開する子育て支援活動は一定の効果をあげているものの、現代家族、また、子どもたちは、以前にも増して、家族の孤立、経済的問題、児童虐待、ドメスティック・バイオレンスなど多くの困難を抱えています。　私たちは、研究センター設立以前から、子どもを乳幼児に限定せず、学齢期や若者も含め育つ過程・環境などに着目して、健全なこどもの育ちや自立を阻むものは何か？どんな取り組みが必要なのか？捉えようとしてきました。その間、福祉・医療・教育・雇用などの分野、また、メディアやシンクタンクなど多様な人や組織との繋がりが広がりました。

今年度、「子ども・若者の育ちや自立を考える協働事業」に神奈川県社協・神奈川県・神奈川共同募金会と一緒に携わらせて頂くことになり、担当職員一同、皆張り切って仕事に向き合っています。　既に、１月には交流会を開催。３月には、第１号の「子ども・若者の居場所づくりガイド」を発行しました。次世代を担う子ども・若者の未来を考え行動するたくさんの方々に出会い、活発な対話をしています。事業が行われる３年半の間、確実な歩みを進め、子ども・若者の健全な育ちを、自立を守り、支えることに繋げていきます。

DATA



平成27年こども・若者白書



厚生労働省「国民生活基礎調査」

子ども・若者の居場所づくりフォーラム　@横浜市開港記念会館　2017.1.25　参加者：62名

1部はさいたまユースサポートネット代表理事　青砥恭氏より「現代社会における、子ども・若者にとっての居場所の価値」を講演していただきました。

2部は交流・情報交換会「ワールドカフェで出会おう！語り合おう！」を開催し、3つのテーマを参加した皆さんで話し合いました。ワールドカフェという手法を用いて、多くの方々が交流し、刺激され、活気あふれる時間になりました。

子ども・若者の居場所づくりガイド（導入編）

本事業は、3年間の継続事業になりますが、毎年、子ども・若者の育ちや自立を阻むものは何かを調査・研究し、現状を改善するための対策や実践を検討します。

また、毎年、「子ども・若者の居場所づくりフォーラム」の開催、2つの小冊子「子ども・若者の居場所づくりガイド」、「子ども・若者の居場所事例集」の制作という3つの事業を行います。

平成29年度「子ども・若者の居場所づくりガイド（導入編）」を発行しました。子ども・若者の育ちや自立についての神奈川県の方針や、子ども・若者の現状を示す、様々なデータを紹介しました。また、次世代を担う子ども・若者について支援の必要性について研究者や先駆的な活動者にも寄稿・インタビューなどさせて頂きました。多くの方に手に取り読んでいただきたいと思っています。

社会福祉法人　神奈川県共同募金会
事務局長　中島　孝夫さん

1947年、戦災に遭った児童養護施設の“子ども達”への支援などを目的に開始された「赤い羽根・共同募金運動」が、2017年に創設70周年を迎えました。

共同募金会では、創設以来、民間福祉活動を資金面で支える役割を担ってきましたが、近年、多様化する市民のニーズに即応していくために、従来からの配分事業に加えて、社会的な課題の解決に向けた取り組み等に、直接参画していくことが求められています。

そのためには、社会福祉協議会や専門性の高いNPOとの協働が不可欠で、2016年度から新たに、よこはま地域福祉研究センター、神奈川県社会福祉協議会とともに「子ども若者の育ちや自立を考える協働事業」を開始しました。共同募金会が、地域福祉分野の実践活動に企画からNPO等と協働した事例はなく、まさに全国初となります。

2016年度の事業では、すでに現代を生きる子どもや若者の情報共有をはじめ、支援団体との緩やかなネットワーク化など、協働による多くのメリットを見出すことが出来ました。

共同募金運動70周年を機に、地域に根付いた組織運営と時代に即した事業の展開、また質の高い事業を行う上での職員の実践研修の場として、この協働事業がさまざまな角度から全国の良き例証となるように、使命感と期待感を持って取り組んでいきます。

社会福祉法人　神奈川県社会福祉協議会
総務企画部　古張 忍さん

本会では、平成28年度を初年度とする「活動推進計画」に「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」を新たに位置づけました。生活困窮や社会的孤立の予防に向け、これまで取り組まれてきた地域の実践と、新しい主体による取り組みを縦横につないでいくことができたらと、よこはま地域福祉研究センター様、神奈川県共同募金様と３か年の協働事業に取り組んでいます。

この「子ども・若者居場所づくりフォーラム」では、子ども食堂等の取り組みが広がる今、様々な立場の人が集い、根底にある課題の共有と意見交換ができました。その内容を『子ども・若者居場所づくりガイド』（県委託事業）にまとめ、取り組みの視点を明確にし、多くの方々に発信することができたと考えています。

この協働事業を通じ、子ども・若者の育ちや自立に関する課題を軸に、彼らを育む地域や大人がどうあるべきかを考え、地域全体の支え合いにも広がっていくよう取り組みたいと考えています。

神奈川県社協委託

社会福祉協議会の ソーシャルワーク実践に向けた協働事業

～地域の未来につなげる住民主体のアセスメント～

社会福祉協議会は、民間団体ではあるものの法律（社会福祉法）に定められ、行政区分ごとに組織された団体で、民間と公的機関・組織の両面のメリットを生かしつつ、地域福祉の推進を図ることを目的としている団体です。今日、地域の多様性、世帯の多様性が広がり、小地域に着目した個別支援や地域支援が求められるなかで、社会福祉協議会のネットワーク力や住民との協働を拓く力が全国各地で発揮されることが期待されます。当研究センターは、設立以来、複数の県社協・市町村社会福祉協議会と多様な仕事をさせて頂いていますが、異なる組織であっても共通の目的を持って、協働することで、貴重な学びや情報を得る機会となっています。

本事業は、神奈川県域市町村社会福祉協議会（以降、○○市町社協）のコミュニティソーシャルワーカーの育成を目的とした仕事です。県域から、２つの市町村社協を選び、二人のコミュニティソーシャルワーカーに、住民主体の「アセスメント」を実践してもらい、そのプロセスを小冊子にまとめ、改めて、住民とともに地域を知ることから始めるコミュニティソーシャルワークの価値を共有し、一層、社協ワーカーならではの生き生きした地域福祉実践が行われることを願って取り組みました。

「アセスメント」は、当研究センターでは、地域福祉を行う上での、基本的かつ不可欠な取り組みとしており、アセスメントの目的の定め方、アセスメント方法の選択や分析法、更に、アセスメント結果の活かし方など、２つの社協の実践の中でも、社協ワーカーやアドバイザーの先生方と共に、効果的なアセスメント実践につながるよう伴走しました。また、これらを示した、小冊子は、様々なワーカーの方に関心を持って手に取って頂けるよう構成やデザインにこだわりを持って制作しました。

今後は、本事業や小冊子も活用しながら、更に多くの社協ワーカーの方々とアセスメントを、地域福祉推進の方法を、様々な考えることに繋がっていければと考えています。

身につけて欲しい

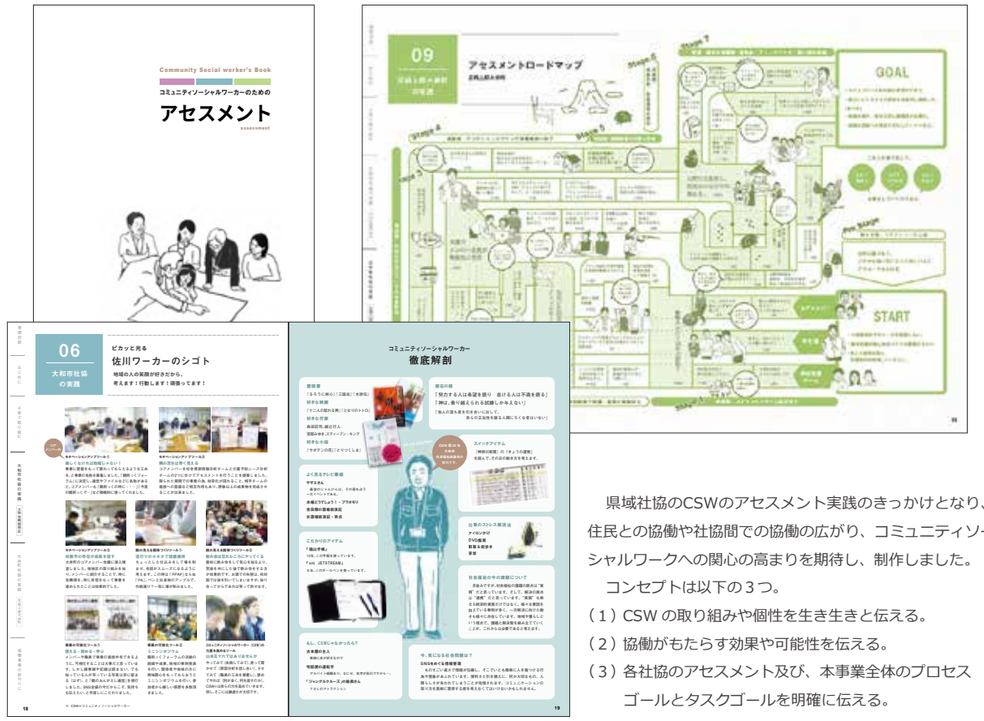
５つのチカラ

- 01 個別ニーズを活動の出発点として コミュニティワークを展開するチカラ
- 02 ニーズをキャッチしたら、組織で 解決に導くチカラ
- 03 地域の情報・資源・特性について 正確に把握するチカラ
- 04 ニーズや課題に応じた 住民主体の活動を展開するチカラ
- 05 社協ワーカーのスキル・情報を共有し、 社協組織としてソーシャルワーク機能 を果たすチカラ

伴走支援フローチャート

①4者会議の結成と実施（全6回）
神奈川県社協・大和市社協・大井町社協・よこはま地域福祉研究センター
↓
②アセスメントを理解する研修実施（全3回）
↓
③各市町村社協別アセスメントの実施と伴走支援
↓
④アセスメント報告会の実施
「地域を知り、取り組みにつなげる！」
↓
⑤実践報告書（冊子）の制作

コミュニティソーシャルワーカーのためのアセスメント
Community Social Worker's Book



報告書企画・編集・デザイン：NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター

県域社協のCSWのアセスメント実践のきっかけとなり、住民との協働や社協間での協働の広がり、コミュニティソーシャルワークへの関心の高まりを期待し、制作しました。

コンセプトは以下の３つ。

（１）CSW の取り組みや個性を生き生きと伝える。
（２）協働がもたらす効果や可能性を伝える。
（３）各社協のアセスメント及び、本事業全体のプロセスゴールとタスクゴールを明確に伝える。

地域福祉推進部　地域福祉推進担当
主任主事　小林　幸子さん

平成28年度の協働事業は、実施の半年以上前から当時の上司とセンターに何度も伺い、どのように進めて行けるかを相談しての実施となりました。当初のイメージを共有するところから一緒に動いていただいたことで、その具体化がスムーズに実行できたと感じています。

事業がスタートし、大和市社協の佐川さん・大井町社協の矢野さんと進める中で、センターの福田さん・吉川さんがそれぞれに密着取材を、佐塚さんが全体へのアドバイスをしていただきました。ワーカーに疑問や不安が生まれたとき、そしてイメージ以上の成果があったとき、お互いが共有し、方向性を確認できる場として、4者での定期的な打ち合わせが非常に有効に働いたように思います。

また、「社協以外の客観的な目」が入ることで、視野の広がりを感じました。これは、大和市社協・大井町社協での今後の具体的な活動の広がりにもつながっていくのではないかと期待されます。一年間、ありがとうございました！

大和市社会福祉協議会
ボランティア振興課長　佐川　博之さん

大和市社協において、各種講座や地域福祉活動計画の策定など外部から講師や研究者を招聘することはあっても、事業そのものの推進を外部機関と一緒に取り組む機会は殆どなかったのが現状でした。今回の「コミュニティソーシャルワーク実践に向けた協働事業」の取り組みは、私たちの実践がライブ感覚で第三者に客観的に評価されるという、これまでにない新鮮な体験であったと思います。また、事業の企画や内容もさることながら、職員の仕事の仕方に踏み込んで助言をいただいたことは、実は法人内でもなかなかできていない、個々の職員の業務評価やモチベーションを高めていくという、上司としての姿勢にも一石を投じていただくものでした。研究センターのスタッフの関りで印象的であったのは、より良いものをつくるためには妥協を許さないプロフェッショナルな姿勢と、楽しんで一緒に取り組もうというパートナーシップの醸成でした。

決して控えめな性格とは言えない私に「もっと自分のことや業績をアピールしていいと思いますよ。佐川さんは、控えめで遠慮しすぎです」と言われたときに、これが民間の研究機関やシンクタンクの積極性なのだ、と目から鱗が落ちる思いでした。そんな、個性的で、魅力的で、エネルギッシュなスタッフの皆さんからの叱咤激励（愛の鞭？）は、上司のそれとはまた違った心地よさがあった、と今あらためて思い返しています。